

諷刺の方法

—A. Huxley の *After Many a Summer* に於て—

清 田 幾 生

Huxley's Satire in *After Many a Summer*

IKUO KIYOTA

作家が諷刺を行う場合、その目的に従って色々なものがとりあげられる。それが社会の欠陥に向けられたものであれ、人間の愚劣さに向けられたものであれ、それにかかわる人間の集団、或いは個人を描くことによって諷刺は始めて可能になる。諷刺はしばしばその対象をいわゆる *reductio ad absurdum* の方法で戯画化するものであるが、そこで人間個人を戯画化する方法が問題になってくる。つまり諷刺のもたらす笑いを創造する時に人間の捉え方がいかなる観点による方法でなされているかということである。それは諷刺する作家により或る一定の型がある、と言っているかも知れない。そしてそれは人間観察の一つの方法でもあるからには、その作家の人間観と密接な関係がある筈である。

小説家としての A. Huxley は諷刺という点で大きな才能を示すが、彼にあっては人間の捉え方は、主として心理学的な、また生理学的な観点に立ってなされる場合が多い。空想的諷刺小説 *After Many a Summer* は彼の後期の作品であるが、これを書いた時期すでに彼にとっては価値の基準というべき positive な思想に到達している。以下この作品に於ける諷刺の笑いをもたらす部分をとりあげ、作者の心理学的、生理学的手法による人間の捉え方を見ることにする。併せてその手法と、彼の positive な思想とのいわば接点をさぐってみたい。その際この諷刺作品のもつ社会的な意味、或は作者の社会観などを度外視して、作家個人の内部に於ける過程として論じることとする。

(一)

この作品の登場人物に関する笑いは、先ず作者が彼らを心理的にながめた時に起ってくる。彼らが喋る言葉、或いは彼らが起す行動が直接に笑いを誘うのではなく、彼らの言動の心理的背景を作者が捉え、その心の動きを的確に書き表わす時に滑稽感が生じてくる。先ず作者が心理的に人間の弱さを描く例をあげてみる。

Jo Stoyte felt aggrieved that Bill had given him so many reasons for liking him. He

would have preferred to like him without a reason, in spite of his shortcomings. But Bill had few shortcomings and many merits, merits which Jo himself did not have and whose presence in Bill he therefore regarded as an affront. Thus it was that all the reasons for liking Bill Propter were also, in Jo's eyes, equally valid reasons for disliking him. (p. 127)

これは他人に対して常に優越感を保っておきたがる Jo Stoyte という人物が、何ら人間的欠点のない（と作中で設定されている）昔の友人 Bill Propter に抱く感情を述べた部分である。長所をもった人間に対してむしろ抱くべき positive な感情が、奇妙な心の操作によって不当にも negative な感情に変る過程が描かれている。我々が周囲の人間に対して抱く反感や怒り、或いは嫉妬が、ここに書かれているような経過をたどっていることはありうることである。引用した部分は、たとえばフランスのモラリストのラ・ロシュフコオがもっと簡潔で皮肉な言葉で、「もしわれわれが欠点をもたなかったら、ほかの人の欠点に気づく場合、こうまで嬉しくはないはずだ」^⑩と言った心理状態を逆の立場から述べている。

この Jo Stoyte は大きな会社を幾つも経営しているアメリカの大富豪で、豪華な邸宅に住みながら、雇った労働者をひどく虐待している。一方 Propter は作中では作者の批判を受けない唯一の人物で、粗末な家に住みながら何かと惨めな労働者の味方になって世話をする。彼が Stoyte の代理人に労働者の給料をもっと上げるべきだと忠告したと聞いて、Stoyte は激怒して彼に言う。

'You're trying to make communists of them.' The word 'communist' renewed Mr Stoyte's passion and at the same time justified it; his indignation ceased to be merely personal and became righteous. (p. 129)

自分で口にした 'communist' という言葉に資本家的な鋭敏な反応を示し、その怒りが正しいと自ら思いこんでしまう所が笑いを誘う。ここでは自分の激怒が正当化されたと感じる不当な心理的過程に作者の狙いがあり、怒りという熱情がどんな場合にも正当化されず、そこには必ず不純な動機が潜んでいることが提出されている。これは伝統的なキリスト教に対する作者の態度にも通じることであるが、Huxley は所謂 'righteous indignation' というものを信じない。

諷刺作家が屢々そうであるように、Huxley は人間を描く場合その対象から一步距離を置いて観察するが、その諷刺が極めて辛辣な場合もあれば、軽い揶揄の場合もある。人間の心理をふまえて作者が人物を揶揄する時に軽妙な笑いが生じる。たとえばここにプラトニックな恋をしている若い男がいる。所が相手の女性は彼に「友情」だけしか感じていない。それは恋する男にとってつらい所である。その女性が何かの話をすれば、普通なら興味のない話題でも彼は熱心に聴き入る。男には面白くもない馬鹿馬鹿しい話を終って彼女は彼に言う。

'Sounds like a swell story,' said Virginia. 'Don't you think so, Pete?'

Pete thought so; he was ready to think almost anything if she wanted him to. (p. 71)

Pete はここで軽く揶揄されているが、同時に彼の愛情の程度も説明されている。この Pete は Virginia となるべく二人きりになりたいのだが、仲々そういう具合にゆかない。その機会がたまたまありそうな時に、もう一人の男性が同席している。彼は Pete の上司であり、しかも若い Virginia によく影響を与えている。彼が仲々立去ってくれないので Pete は心中おだやかでない。幸い件の上司は片づけなければならない用事を思い出す。

Dr Obispo looked at his wrist-watch. 'I'd forgotten,' he said. 'I've got some letters I ought to write before dinner...'

'That's too bad !' Pete did his best to impart to his tone and expression the cordiality of regret he did not feel. In fact, he was delighted. (p. 86)

「それは本当に残念です」と Pete は語調を強めて言うのだが、心の中ではしめた、と思っている。作者は彼の心の内をすっきり見すかして、それとはうらはらな言葉の出る過程を簡潔に書いている。その皮肉な描き方がこの場合軽い笑いをもたらす。Huxley の小説に於ける笑いは作者が人物の心理をいわば手中におさめて皮肉な効果をもたらす的確さで描く時に見られる。人間が一見どんな立派な言動を示そうと、作者はその裏に潜む不純な動機を心理的に捉えて冷笑的に提供する。人間の見せかけや虚飾が、作者によりその正体が暴露される時その見せかけや虚飾と、それを作り出した打算的な正体との距離感に笑いの効果は集中される。こういう意地の悪い視点からながめると人間は多かれ少なかれ偽善者であらざるを得ない。引用した Pete の場合も一種の小さな偽善である。

もう一つ例をあげると、ここに相手の迷惑を考えずに自分の個人的な話を長々とする人がいる。彼の長話に少々うんざりしている聞き手が少し気弱で 'gentlemanly' な人間であった場合、彼はどのような相槌をうつであろうか。

'That's very interesting,' said Jeremy with hypocritical politeness. (p. 57)

相手の話にあまり興味のもてなかった聞き手のこの言葉はちょっとした社交辞令であるが、作者は with hypocritical politeness というシニックな語句を付加することを忘れない。些細な言葉にも人間は偽善的な存在と見られているのがわかる。偽善の暴露はとりわけこの作家の得意とする所であるが、この作品のように諷刺の目的が別の所にある場合でも、人物の多くはその偽善性が揶揄されている。Huxley は人間をはなれた所から観察し、その批判精神は人間の心の動きに向けられる。人間の気どりや尤もらしい言動の背後にある利己心、私利私欲が露悪

的に書き出され、作者はそれに対して眉を顰めながら読者の笑いを誘う。この心理の透視術は人間の弱点を見のがさないが、その場合諷刺の力点は人間の外面と、それとはうらはらな利己心とのへだたりに置かれている。そこに起る笑いの性質は人間を共感をもって見ることから来る *sentimentality* は少しもない。むしろ皮肉をおびた、乾燥した知的なものである。それは人間の弱点に対して意地の悪い態度をとることであり、作者自身その意地の悪さを相当に楽しんでいるようにも思われる。こういう滑稽感とはしかに読者の笑いを誘うが、それは手ばなしの完全な笑いではない。読者は作者により嘲笑された人間の愚劣さや虚栄心の可笑しさを無条件で完全に無関係の立場で笑うのではない。その諷刺の対象と何らかの意味で自分もかかわりがあることを認識せざるを得ない。描かれた人間の滑稽さに自分も幾らか関係があるのに気づく時、読者の笑いは無制限なものでなくなって何かによって拘束される。恐らくその時笑いは苦い笑いとなる。諷刺の効果はこういう所にもあると思われる。しかし他人の弱点に接してそれを笑いながら共に苦々しさを感じるのは、諷刺作品をよむ読者側だけであろうか。

この作者に特有な意地の悪い視点は時には作中の人物にも移される。心理の透視術により眺められた時の人間の滑稽感だけでなく、そういう視点から人を見るシニックな人間の可笑しさを作者が狙っている場合もある。この作品に於て、古文書 'Hauberk Papers' の中に発見された昔の一貴族の日記という設定で、作中に挿入されている文章にそれが見られる。

'A sick, rich Man is like one who lies wounded and alone in the deserts of Egypt; the Vultures hover lower and lower above his head and the Jackals and Hyenas prowl in ever-narrowing circles about the place where he lies. Not even a rich Man's Heirs could be more unsleepingly attentive. When I look into my Nephew's face and read there, behind the mask of Solicitude, his impatient longing for my Death and his disappointment that I am not already gone, I feel an influx of new Life and Strength. If for no other reason, I will live on to rob Him of the Happiness which he still believes (for he is confident of my Relapse) to be within his Grasp.' (p. 217)

これは18世紀のイギリスの風変りな老貴族の日記の一部ということになっている。彼はこの日記をつけた頃病にたおれている。死後の遺産を狙ってその甥が伯父の病気がいかにも心配だといった様子で何かと彼に近づいてきたのであろう。伯父が死ねば間もなく遺産が手に入ると思って甥は内心北叟笑んでいる。遺産が手に入ると確信している甥の幸福感を奪う為にも長生きしてやろうとこの Gonister 伯爵は意地悪く決心する。その意地悪い心理がここでは殆どグロテスクな滑稽感を起しているが、これはこの作者に特有な、人間の弱点を観る視点をそのまま客観化し、そういう意地の悪さで笑いをねらった部分である。

その初期の作品から、Huxley の作中人物は少数の例外を除いて殆ど凡てがこういう風な嘲笑的な否定のされ方をしている。彼の人間諷刺の方法は第一に人間を心理的に分解して、その

尤もらしい言動とはうらはらな不純な要素をえぐり出し、それを拡大して提出することから成っている。人間の体裁のよい外見や行為、言葉或いは主義主張が、その背後にある欲得や打算に還元されるのである。このような心理学から人間を観ると、殆どの人間はあまり信用出来ない利己的な存在に映るはずである。これは単に Huxley の諷刺の方法にとどまらず、彼の人間観察の一方法でもある。小説家としての出発当時から彼はこういう皮肉な人間観察の方法を身につけており、その人間観はますます人間不信の色合に近づくことになる。Huxley が人間の愚劣や虚栄を嘲笑する時、その辛辣さは時には明るい笑いをもたらすが、その人間に対する反応は必然的に厭人の度合が濃くなってゆかざるを得なくなる。人間一般に対する不信や絶望が、その弱点の戯画化と冷笑を行わせ、一方その過程に於てますます厭世的になってゆく。諷刺を行う批判精神と、ペシミズムは恐らく表裏一体のものであろう。Huxley の場合、そのシニックな人間観察法が彼のペシミズムを育てたことは大いにあり得ることで、その後期の作品程、彼の体質的とも言える人間嫌悪をかなり露骨に示している。

引用した 'Hauberk Papers' の中の Gonister 伯爵の日記が、作者と同じ心理的視点に立っていることは前にも述べたが、この貴族は後に次のような日記をつけている。その中で彼は動物と人間を比較しているが、この厭世的な人間観は作者のそれと明らかに一致している。

'This year the anniversary of my birth calls up Thoughts more gloomy than ever before... The stupidity of the Brutes is without pretensions and their malignity depends on Appetite and is therefore only intermittent. Men are systematically and continuously cruel, while their Follies are justified in the names of Religion and Politics, and their Ignorance is muffled up in the pompous garments of Philosophy...' (p. 235)

Huxley は外出する時いつもラ・ロシュフコオの「箴言集」小型版を携えていたと言われて^⑨いるが、確かに彼の人間観察の方法やシニシズムはこの17世紀フランスのモラリストと共通する点が多く、かなりの影響を受けたであろうと思われる。Huxley も時折箴言風な言いまわしを好む傾向を見せるが、何よりも、「われわれの美德は、ほとんど常に、仮装された悪徳にすぎない」^⑩と述べたラ・ロシュフコオの発想が、Huxley の人間性の観方の根底に見られるのである。「箴言集」にあっては、外面の尤もらしさを基準にした道德の一つ一つが人間の私利私欲、打算、つまり「自己愛」にもとづくものとして辛辣にあばかれている。世間がいう愛、勇氣、沈着、謙遜、誠実などさまざまな美德が、彼特有の心理学により、利己主義の仮装としていささかの仮借もなしにえぐり出されている。彼のシニシズムは、Huxley のそれよりはるかに徹底的で、しかもそれを表わす時の姿勢は、はるかに毅然としている。Huxley の場合は同じ偽善をあばくにも、(勿論文学表現の形式が違うが)もっと軽い揶揄的な態度があり、陽気な明るさすらある。類似した心理学のシニックな観点に立ちながら、人間の弱さをあばくにも Huxley の辛辣さにはある奇妙な明るさが伴うことも多く、また彼自身それを娛しんでいる形跡

も見られる。恐らくこれは実生活の経験の違いから来るのであろう。ラ・ロシュフコオは彼が熱中した政治にも恋愛にも、したたか裏切られたいわば人生の敗北者であり、恐らく傲慢と思える程の性格であったから、人間の愚劣に対する侮蔑がはるかに徹底している。

しかしながら Huxley が人間の偽善性を顔を顰めて揶揄する時に、その対象を心情的には完全に否定出来ない姿勢の弱さが感じられる。彼はラ・ロシュフコオのように殆ど完全に絶望しきった時点から物を言っているのではない。彼の揶揄の軽妙さはそこに由来するのであるが、彼の揶揄には常々彼特有のポオズやペダントリーが伴うのである。揶揄とは或る意味で屈折した感情のあらわれでもある。Huxley が批判の対象から一步距離を置いて諷刺精神を働かす時、半ば後めたい気持で自己の立場の余裕と優越性を意識している所に弱さがあり、言い換えるとそれは彼が自己の人間観察の基盤に不安を覚えている事を意味する。彼の諷刺の滑稽感と辛辣さに、人間不信の要素と同時に自己に対する不安がただよっているのは彼の弱さを示しているように思われる。しかし彼はラ・ロシュフコオとは別の意味で人間に対する嫌悪を強烈に見せる場合がある。それは主として彼が人間を生理学的な観点に立って眺める時である。

(二)

With professional thoroughness, Dr Obispo shifted the muzzle of his stethoscope from point to point on the curving barrel of flesh before him...

'Cough again,' he said, planting his instrument among the gray hairs on Mr Stoyte's left pap. Among other things, he [Dr. Obispo] went on to reflect, while Mr. Stoyte forced out succession of artificial coughs, among other things, these old sacks of guts didn't smell too good...

'Turn round, please.'

Mr. Stoyte obeyed. The back, Dr. Obispo reflected, was perceptibly less revolting than the front. perhaps because it was less personal.

'Take a deep breath,' he said...

Mr. Stoyte breathed enormously, like a cetacean. (pp. 137—9)

これは富豪の Jo Stoyte が皮肉屋の医者に診察を受けている 場面である。Jo Stoyte は肥満した肉体の持主で、もう中年も過ぎて最近ひどく身体のおとろえを感じている。彼はひたすら死を恐れ、死後の世界にひどく恐怖を感じている。死の影を一切忘れてしまう様に造られた豪華で異様な邸宅に彼は住み、生と若さに対する病的な執着のあまり、医者や学者を雇って不老長寿の研究をさせている。引用した個所は comical な筆致で彼が揶揄されているが、それは専ら彼の肉体に向けられている。この部分はたしかに或る種の笑いを誘うのであるが、一人の人間が生理的に negative な形で捉えられており、すでに対象に対する作者の不快感が感じられ

る。この場面の滑稽感は診察する医者態度からも生じるのであって、彼はこの「あまりいゝ臭いのしない」患者が背を向けた時に、前を向いている時より 'less personal' だから嫌悪感が少いと感じる。この医者視点と感情はこの場合作者のそれと一致していると言ってよい。この様な視点から眺めると凡ての人間は不快で汚なく、醜悪な存在となってくるであろう。美しい精神的存在であるかも知れない人間は不快感をもよおさせる醜い存在として映ってくる。Huxley は人間の諷刺する時に、人間の肉体のいとなみを極端な形—たとえば性—で捉え、生や健康を正当化することはあっても、必ずそこには肉体にまつわる不快感や惨めさ—苦痛や死—が伴ったものとして提出する。そこには諷刺のもたらす笑いはあっても、常にその笑いを抑制する異様なものが感じられる。そして勿論作者の狙いはそこにあるのである。

'Dying is almost the least spiritual of our acts, more stricktly carnal even than the act of love. There are Death Agonies that are like the strainings of the Costive at stool.
(p. 214)

この文章は 'Hauberk Papers' の中の Gonister 伯の日記の一部であるが、相当に露骨な内容が箴言風に述べられているだけに一層笑いの効果がある。この様に、人間の肉体的存在の実感がグロテスクな笑いのうちに、生と死、苦痛、性、排泄の行為という形で提出されている例はこの作品にも散見する。こういう生理のいとなみという点から異様な笑いを造る作者は、その内部にかなり屈折した要素をもっている。それは人間の肉体というものに対する一種 ambivalent な態度であり、Huxley は後期に神秘主義への傾斜を深くするにつれて、肉体の不快な局面を多く作品に描くようになる。神秘主義に対する関心と平行して、そういう人間の生理的的局面を、その嫌悪感にも拘わらずかなり執拗に描く奇妙な嗜好を示すのである。そもそも *After Many a Summer* という作品自体が人間の肉体性に対する諷刺という形をとっている。前にも述べたアメリカの富豪 Jo Stoyte は利潤追求欲がますます旺盛になる一方、老いが近づくにつれ肉体の衰えや死に対する恐怖も募ってくる。彼に雇われた医者や学者は雇主の希望で長生術の研究をしている。彼らは実験用の動物として狒々 (baboon) を飼育している。次に引用する部分は、Stoyte の健康のバロメーターである若い Virginia が、医者 Obispo その助手 Pete と共に飼われている狒々の生態を見物する所である。Pete は餌を与える役目である。

To the right, on another shelf of rock, a formidable old-male, leather-snouted, with the grey bobbed hair of a seventeenth century Anglican divine, stood guard over his submissive female... From the basket he was carrying, Pete threw a potato in his direction, then a carrot and another potato. With a vivid flash of magneta buttocks the old baboon darted down from his perch on the artificial mountain, seized the carrot and, while he was eating it, stuffed one potato into his left cheek, the other into the

right; then, still biting at the carrot, advanced toward the wire and looked up for more. The coast was clear. The young male who had been looking for dandruff suddenly saw his opportunity. Chattering with excitement, he bounded down to the shelf on which, too frightened to follow her master, the little female was still squatting. Within ten seconds they had begun to copulate.

Virginia clapped her hands with pleasure. 'Aren't they cute!' she cried. 'Aren't they *human!*' (pp. 81-2)

作者はこの三匹の毛深い動物の関係を、実に皮肉な方法でそのまま作中人物たちのそれと平行線をたどるように筋を仕組んでいる。つまりこの小説の後半では、このボス猿と、その性的支配下にある牝猿、そしてそれを襲う若い牡猿の関係が、富豪の Jo Stoyte, Virginia それと好色な医師 Obispo の演じる劇と同じものである。そういう運命になるとも知らず若い Virginia は、目の前の狒々の性的行為を見て手をたたいて喜び、「人間みたいだわ」と叫ぶ。彼女がここで無邪気であるだけにその滑稽感は一層皮肉をおびていて、この作者の辛辣さと行儀の悪さは相当なものである。これは単なる皮肉な滑稽感を通り越して、一種グロテスクな笑いの域に近づいている。この異様な笑いを造り出す作者の行儀の悪さの背後には、一種苦々しい屈折した感情がよみとれるような気がする。彼は彼特有の *detached* な態度で対象を嘲弄するのだが、その態度には対象から距離をおいた自己に完全に安心しきっている所はない。顔を顰めてみせて読者の笑いを誘う作者の表情に、諷刺を行う傍観者としての余裕がこわれて、不安で歪んだものが感じられはすまいか。

この空想的諷刺小説で作者が醜い狒々の生態を描いた理由は、この作品の終りの部分で明らかとなる。Jo Stoyte に雇われている学者は、前に述べた 'Hauberk Papers' の Gonister 伯の日記の中に興味あることを見出した。その日記によれば、この18世紀の老貴族は色々な研究を重ねた結果、若さと生命を長く保持する方法を発見したのである。しかしこの好色な伯爵は、自らの漁色の醜聞のために危い所で逮捕されそうになるが、世間には死亡したということで身を隠さざるを得なくなった。日記はそこで終わっている。百年以上も前のこの事実を発見して医者 Obispo らは英国に渡り、まだ生存しているかも知れない伯爵を屋敷に訪ねる。彼がまだ生きていたとすれば、もう二百才を越えている筈である。やっとさがしあてた暗い地下室で身を隠しながら伯爵は確かに生きていた。

On the edge of a low bed, at the centre of this world, a man was sitting, staring, as though fascinated, into the light. His legs, thickly covered with coarse reddish hair, were bare... Knotted diagonally across the powerful chest was a broad silk ribbon that had evidently once been blue. From piece of string tied round his neck was suspended a little image of St. George and the Dragon in gold and enamel... With one of his huge and

strangely clumsy hands he was scratching a sore place that showed red between the hairs of his left calf. (pp. 311—2)

生きてはいたが、長生術を長くつづけた結果、彼は毛深い猿に退化してしまっていたのである。醜悪な身体にうすよごれたガーター勲章をおびて、このかつては人間だった漁色家は、同じく猿に化した昔の家政婦と浅ましい関係をつづけている所で、このグロテスクなファルスは終っている。

この作品は、人間の肉体を時間の上で延長しようとする願望、人間が人間のままで存続することを諷刺したものであろう。しかしながらこの異様な空想には、表面のグロテスクな笑いの背後に、人間の肉体、或いは肉体をもっている人間そのものに対する作者の嫌悪感がただよっている。人間が今のまゝの肉体的存在として存続することは、動物的延長にしかすぎない、というモラルより、ここでは「猿」のイメージが強烈なのである。不老長寿に成功した Gonister 伯爵が醜悪な猿になっていた事と、前に Virginia が狒々の交尾を見て、「人間みたいだわ」と言ったことを考え併せてみると、作者が人間一般を見る時の反応が浮き上がってくるのである。「人間みたいだわ」という言葉により、動物の醜悪ときたなさが人間世界のそれに転化されているのだが、作者が眺める人間の世界は、ここでは baboon の集まりと同質であることが、一つの意味をもって迫ってくる。

Huxley が生理学的な観点に立って人間を観る時、それは彼に嫌悪感しかもたらさない。そこにかかる笑いはグロテスクな笑いであるが、その笑いの裏に作者の人間嫌いの要素が一層強く感じられる。そのような嫌悪感が強烈であるにも拘わらず、人間の肉体の弱さが執拗に描かれる。時には極端な形で性や排泄に関することが材料になる場合があり、とりわけ性に関しては好色本の作者のような興味たっぷりな approach の仕方を見せる。そこに描かれた場面が明るい笑いをもたらすかと思うと、必ず肉体のみじめさ、いまわしさに対するシニシズムが伴っている。このように分裂しているかに見える態度は、恐らく作者が自己を含めた人間一般を見る時の苦々しさに由来するのであろう。人間不信と厭世的な状態が彼に強い苦渋感のようなもの、これが奇妙なグロテスクな笑いの間に感じられるのである。

(三)

Huxley が人間一般を眺める時に、それは主として心理学的或は生理学的な観察方法によってなされる場合が多い。その際いずれも人間のもつ弱点が誇大化されて映っていて、彼の人間観は強い不信の様相を呈する。心理的に観れば人間は結局打算やエゴイズムによって動く救われない存在であり、生理的な観点に立てば、嫌悪をもよおす醜い存在となる。人間性に対する不信と絶望が、その愚劣、弱さ、醜悪さを嘲笑する諷刺の姿勢を生み出し、その結果ますます暗い人間不信や厭世に導かれる。^⑥ Huxley の場合、もとよりこの人間観察の方法は他者のみで

なく自分にも向けられる筈である。強烈な批判精神にめぐまれた懐疑家が、自己だけをその批判の視野から除外するには、余程強靱な神経か、或いは楽天的な鈍感さが必要であろう。この自意識過剰な作家は自己の世界と他者の世界に大きな距離をおきながら、その批判の視野から自己をはぶく強さが、とりわけ欠けている。彼が人間の世界を *baboon* の世界と同質に見る時に、その世界には当然自己も含まれていてそれを彼は自覚していた筈である。この小説の笑いの背景にただよう作者の苦渋感は、この苦い認識の不安にも由来するのであろう。嘲笑する対象に一步距離をおいて無関係を装う所に笑いが生じるが、作者自身も実は無関係ではないと自覚する時に、その笑いは苦々しさから歪んだ性質をおびる。批判精神は両刃の剣のようにその持主をも傷つけずにはおかないのであろう。古来批判精神にめぐまれた諷刺家の多くが、しばしば自ら傷ついている所以である。

Huxley の長篇小説では殆ど常に作者自身の投影を受けていると思われる人物が登場するが、多くの場合それは作者による批判か諷刺の対象になっている。その諷刺がもたらす笑いのうちにも、自己の弱点に対する作者の不安が見られる場合が多い。それは極端に言えば自嘲的な形であられる。もとよりそこには彼特有のポオズやペダントリーもあり、自己批判という半ばは自虐的な姿勢が、恐らく誠実さにつながることを計算している読者意識もあるかも知れない。しかし、そもそもそういう過剰な自意識が彼の弱さを物語っていよう。

自己の内部にそういう弱さを持っている者にとって、人間一般に対する嫌悪感とペシミズムに耐えうるかという事が問題になってくる。Huxley は恐らく厭世的な人間嫌悪が何に通じるかを知っていた筈である。恐らくもっと規模の大きな諷刺家で、人間全体に対する憎悪を示す Swift について、かつて Huxley は、その肉体の醜悪さをしつこく描く傾向を指摘しながら、「傷ついた人が傷口に、歯の痛む人が歯にさわらずにはいられないように、彼は自己の腸ざらい (*hatred of bowels*) を自ら想起せずにはいられなかった」^⑨と言っている。Swift のそのような狂気とまではいかなくとも、ペシミズムが彼にもたらす索漠とした精神状態に対する恐れが、自己の弱さを意識している Huxley になかっただろうか。 *Eyeless in Gaza* の中には作者の自画像的人物 Anthony は、シニクな人物であるが、その寒々とした精神状態について、作者は別の人物に、「そう、その黄色い皮膚……そして皮肉、懐疑主義、凡てに対す否定的態度！君が考えることは凡てが否定的だ」^⑩と言わせている。人間が常に *negative* にしか見えないことは、人間を肯定する契機が全く欠けていることであり、それはモラルの空白状態を意味する。Huxley にとってその内部の空白状態は、いずれ埋め合せなければならなかった。そこには人間を肯定する *positive* な価値観が必要である。伝統的なキリスト教が信じられない Huxley にとって、その厭世的な要素と、神秘主義は、大きなつながりをもっている。厭世と表裏一体の関係にあるシニシズムは理論的にも片をつけなければならない。 *After Many a Summer* の中で、作者の肯定的見解をになった唯一人の人物 Propter は、シニシズムが、批判精神という意味では必要であることを説きながら、その限界について釘をさす。

‘It’s good to be a cynical,...if you know when to stop.’ (p. 117)

体質的に厭世的な 懐疑家である Huxley にとって、この ‘to stop’ が可能であるかどうかは別問題であるが、これは自己の内部を意識している作者の変化を示す指標である。

諷刺というものは、一度自己を高い所に置いて、そこから下にある対象に批判精神を働かせることから来る。そうやって諷刺は始めて可能であろう。それは人間観察や判断の基準を凡庸な判断の視点より高い所に位置づける行為でもある。人間に対する不安や絶望はもともと一つの理想がなければ生れて来ない。よりよきものへの志向が裏切られ挫折した時にペシミズムが生じる。シニシズムは、「よりよいものでなければならない」人間を、「そうではない」と認識する時に感じる絶望の表白でもある。あれ程徹底的で冷やかなペシリストであるラ・ロシュフコオですら、「純粹で他の情熱を交えない愛があるとしたら、それは心の奥底に隠されていて、我々自身の知る所なきものである」^⑩と言っている。この毅然とした厭人家も、人間の心の奥底に純粹なものの可能性を信じるロマンチックな言辞をもらしているのである。

平和主義を標榜する mysticism へ Huxley が大きな傾斜を見せたことは、社会的な意味から言えば、第二次大戦の脅威という険悪な世相の反映であった。しかし彼個人の内部だけに限って言えば、彼自身の人間不信や嫌悪感をもたらすペシミズムへの反応であったとも思われる。自己の内部にある体質的なペシミズムに対する不安があったであろう。それがもたらす空白な精神状態は、人間を救う positive なモラルの欠如を意味する。Huxley にとってはペシミズムと表裏一体の関係にあるかの「純粹なもの」、理想的なものは、恐らく自己の弱さに対する意識から、どうしてもそれを引出し、意味を与え、体系づけなければならなかった。*Eyeless in Gaza* までの Huxley の作品群はその根底に於て、モラルの空白をうめるべき価値の基準を探求する姿勢を示している。そうであれば、人間の肉体の醜悪な局面を彼が執拗に描くのは、肉体の対極的位地にある精神の存在、或は肉体からの解放の可能性を確認する為もあったかも知れない。その多分に病的な傾向を示しながら、いつかは精神が mystify されなければならないのである。ここで彼の神秘主義の内容に触れる余裕はないが、この作品で聖者的人物 Propter が主張していることは、一種の transcendentalism である。Huxley の、人間に対する反応が嫌悪であってみれば、そのモラルの基準はどうしても人間事を越えた所に置かれる。その positive な思想は彼の懐疑心と批判精神に耐えるものでなければならない為に一層理想化された抽象性をおびることになる。かくて自己にも他者にも聖者であることを要求することになり、あくまで chemically pure な彼の資質を示している。ラ・ロシュフコオのペシミズムは挫折した理想主義のあらわれであるが、彼のように実人生の惨めな敗北者ではない Huxley は、知的な合理主義者であり、その positive な思想が極めて書斎的なにおいが強いことは否めない。

Huxley が人間一般を眺める場合、彼の批判精神は主として人間の心理的、生理的ないとなみに向けられる。このような観方がもともと厭人的な性格をもつ者を見ちびく所は、ペシミズムである。人間を嫌悪すべきもの、信用出来ないもの、と知るとは苦い認識である。それが

諷刺という形をとって外にあらわれる。この作者の諷刺がもたらす笑いの背後に、自己を含めた人間一般へのシニシズムだけではなく、人間改革への激しい願望が働いている。その願望を生じさせる根底にあるものは良心という言葉以外に表現出来ないものと思われる。たとえそのあらわれ方に書斎的なにおいがあるにしろ 聖者の世界を強烈にねがうこの作者の誠実さに疑いをさしはさむことは出来ない。彼は人間の世界に、馬鹿馬鹿しいグロテスクな道化踊りをおどる baboon の世界を見た。その醜悪な世界と、その矯正をねがう聖者の世界の間には大きな距離がある。 *After Many a Summer* という諷刺の作品で、読者はこの二つの世界の距離に苦しむ Huxley を見るような気がする。

注

- ① ラ・ロシュフコオ：「箴言と考察」，内藤濯訳（岩波文庫）p. 23
- ② John Atkins: *Aldous Huxley*, p. 21
- ③ ラ・ロシュフコオ：「箴言と考察」，p. 17
- ④ 批評家 Ghose は，
 'Most of Huxley's analyses end with the word "depressing".' と言ってその例を幾つかあげている。S. Ghose: *Aldous Huxley, A Cynical Salvationist*, p. 73
- ⑤ Aldous Huxley: *Do What You Will*, p. 98
- ⑥ Aldous Huxley: *Eyeless in Gaza*, p. 552
- ⑦ ラ・ロシュフコオ：「箴言集」，p. 30

尚，テキストは、*After Many a Summer* (Chatto & Windus 1962) を用いた。

（昭和43年9月30日受理）